

森の石松の生誕地は？

森の石松の生誕地は、まちがいなく富岡ですが、インターネット上のフリー百科事典 **Wikipedia** では、次のように書かれています。

森の石松（もりのいしまつ）

生年月日不明 ～1860年(万延元年)7月8日

清水次郎長の子分として幕末期に活躍したとされるきょうかく 侠客。出身地は三州半原村（後の愛知県新城市富岡）とも遠州森町村（後の静岡県周智郡森町）とも伝えられるが定かでない。浪曲では「福田屋という宿屋の倅」ということになっている。森の石松の「森」とは森町村のことである。半原村説では、半原村で生まれたのち、父親に付いて移り住んだ森町村で育ったという。なお、現在語り継がれている石松は、清水次郎長の養子になった天田五郎の聞き書きによって出版された『東海遊俠伝』によるところが大きく、そこに書かれて有名になったせきがん 隻眼のイメージは、同じく清水一家の子分でぶたまつ 隻眼の豚松と混同していた、または豚松のことを石松だと思って書かれたとも言われており、石松の人物像はおろか、その存在すら信憑性が疑われている。（後略）

（略歴） 孤児となった石松はきょうかく 侠客の森の五郎に拾われて育てられた。侠客同士のけんかから上州（群馬県）で人を斬り、次郎長に匿われてその子分となった。酒飲みの荒くれだが義理人情に厚く、どこか間が抜けており、温泉地の賭場でいんちきサイコロを使って100両もうけたと思ったら、翌日以降300両負けて次郎長の湯治費を丸ごとスッてしまい、仲間から「馬鹿は死ななきゃ直らない」とからかわれた、といった愛すべきキャラクターとして講談や浪花節（浪曲）にも数多く登場する。病で妻に先立たれたばかりの次郎長と共に宿敵を討ち果たし、親分の御礼参りの代参で金刀比羅宮へ出かけた帰路、方々から預かっていた次郎長への香典を狙った侠客の都田の吉兵衛（都田は後の静岡県浜松市北区都田。講談や浪花節では「都鳥」とされる）に、遠州中郡（浜松市浜北区小松と思われる）にて騙し討ちに遭い、斬られて死亡した。吉兵衛は翌1851年（万延2年）、次郎長によって討ち果たされる。（フリー百科事典 ウィキペディアより）

石松が題材となった作品

ウィキペディアに掲載されている、石松が題材となったおもな作品を紹介します。

<映画> 映画名と森の石松を演じた俳優名

- 「清水の次郎長」(1938年, 東宝) 大村千吉
- 「エノケンの森の石松」(1939年, 東宝) **榎本健一**
- 「森の石松」(1949年, 松竹) 藤田 進
- 「殴られた石松」(1951年, 新東宝) 田崎 潤
- 「清水次郎長伝」(1952年, 新東宝) 田崎 潤
- 「唄祭り清水港」(1952年, 松竹) 大木 実
- 「次郎長一家罷り通る」(1953年, 松竹) 堺 駿二
- 「次郎長三国志 第二～八部(1953年～1954年, 東宝) 森繁久彌
- 「次郎長遊侠伝 秋葉の火祭り」(1955年, 日活) 森繁久彌
- 「次郎長意外伝 灰神楽の三太郎」(1957年, 東宝) 森繁久彌
- 「森の石松」(1957年, 大映) 勝新太郎
- 「清水港の名物男 遠州森の石松」(1958年, 東映) 中村錦之助
- 「暴れん坊森の石松」(1959年, 東宝) フランキー堺
- 「次郎長富士」(1959年, 大映) 勝新太郎
- 「森の石松幽霊道中」(1959年, 東宝) フランキー堺
- 「大暴れ森の石松」(1959年, 東宝) フランキー堺
- 「森の石松鬼より怖い」(1960年, 東映) 中村錦之助
- 「ひばりの森の石松」(1960年, 東映) 美空ひばり
- 「次郎長血笑記 秋葉の対決」(1960年, 第二東映) 品川隆二
- 「大笑い次郎長一家 三下二挺拳銃」(1962年, 新東宝) 柳沢真一
- 「ジェリーの森の石松」(1963年, 東映) ジェリー藤尾
- 「次郎長三国志」(1963年, 東映) 長門裕之
- 「次郎長三国志 甲州路殴り込み」(1965年, 東映) 長門裕之
- 「次郎長青春篇 つっぱり清水港」(1982年, 松竹) 島田紳助
- 「次郎長三国志」(2008年, 角川映画) 温水洋一

テレビドラマでも多数の作品があり、石松を演じたおもな俳優は以下の通りです。

藤山寛美 フランキー堺 山田吾一 長門浩之 あおい輝彦 松方弘樹 堺正章
尾藤イサオ 水谷豊 片岡鶴太郎 的場浩司 山本太郎 中村獅童 他

<参考> ウィキペディア ご確認下さい

石松に関わる年表

年 号	年齢	森の石松等の動向	当時の世の中
1826年頃 (文政9)		八名郡半原村堀切 (富岡字堀切) の山本家 (苗字帯刀を許され名主, 庄屋を勤めた家柄) の次男として生まれる。	1825 外国船打払令
1829年頃 (文政12)	3歳	火災で家が焼け, 母親が亡くなる。	
1833年 (天保4)	7歳	父, 助治田畑を預け (証文), 森町へ炭焼きの出稼ぎ。天宮神社祭礼で迷い子, 森の五郎親分に引き取られる。	1833 天保の大飢饉 1837 大塩平八郎の乱
1838年頃 (天保9)	12歳	助治, 堀切へ帰る。近所の幾と再婚。この頃怪力で大人に相撲で負けない。	
1840年 (天保11)	14歳	清水の次郎長に引き取られる。	1841 天保の改革
1846年頃 (弘化3)	20歳	この頃, めきめき頭角をあらわす, 次郎長身内の中で有力な子分となる。	1853 ペリー来航
1858年 (安政5)	32歳	次郎長の妻「おてう」が病死。	1854 日米和親条約 1859 安政の大獄
1860年 (万延元年)	34歳	金刀比羅宮への代参で次郎長が仇討ちした銘刀 (井上真改作) を奉納。帰路, 堀切に帰り2・3日過ごす。都鳥一家に殺される。	1860 桜田門外の変
1861年 (文久元年)		次郎長一家が, 都鳥一家を討つ。	
1862年 (文久2年)		村人に反対され富岡でひっそり葬儀。	1862 生麦事件
1906年 (明治39)		石松の弟, 佐与吉が亡くなる。	
1935年頃 (昭10)		広沢虎造の浪曲で石松が知られるようになった。	

各種の記録から逆算した年代もあります。 <参考> 伊田良種:「森の石松は三河の生まれ」, 本多美佐夫:「森の石松」(史跡巡り資料), 峯田通俊「新城と森の石松」(郷土97), 大洞院 HP 森の石松略伝 (村松梢風)

石松は脚色された人物

石松に使われる表現を集めると、人柄がみえてきます。

- ・型破り
- ・天真爛漫 てんしんらんまん
- ・単純
- ・正直
- ・正義感が強い
- ・子供好き
- ・無邪気
- ・情に厚く、もろい
- ・酒好き
- ・けんか好き
- ・暴れん坊
- ・めっぼう強い
- ・強きをくじき、弱きを助ける
- ・快男児

こういった人物像となっている石松ですが、これらは浪曲師と小説家が人々の共感と人気を得るために脚色していったことが影響しているようです。

この経緯は、講演記録「森の石松はどのように創られたか」に書かれていますのでご覧ください。（静岡市清水区「次郎長翁を知る会」のHP：会報27号静岡大学名誉教授田村貞雄氏）要旨は次のようです。

- ・「三州の石松」は実在の人物で、愛知県新城市の出身で、墓も同所にある。
- ・「三州の石松」を「森の石松」という人物に創り替えたのは大正時代で、これは浪曲師と小説家の合作。
- ・隻眼 せきがんは次郎長の別の子分豚松がモデルで、合成されたようである。
- ・森の石松の墓が森町大洞院につくられたのは1935年（昭10）で、浪曲がラジオで放送されるようになった頃である。
- ・「森の石松」は、三河の石松らをもとに、浪曲師と作家が次々に物語をふくらませた架空の人物。



森町の「森の石松まつり」より

石松は地元の嫌われ者

富岡での石松評価は最悪です。やくざ者として村人から嫌われたため、葬式も普通に出させてもらえず、戒名もなく、石塔も建てられませんでした。これまでに、森の石松でまちおこしを考えたこともあったようですが、根強い反対と子孫や関係者への配慮もあって、実現していません。石松にかかわる富岡での伝承等は次の通りです。真偽が定かでないものもありますが、後世のため記録しておきます。

- ① 「石松のようなやくざになるな。」と厳しく教えられた。

(郷土 97 号：石松と血縁関係にある故峯田通俊氏の記録)

- ② 家族や親戚が肩身の狭い思いをしており、石松の話はしないようになった。(伊田良種氏)

- ③ 石松が隻眼というのは作り話で、体格のよい大男だった。映画「エノケンの森の石松」がヒットし、演じた榎本健一が小柄だったため、石松のイメージが変わったのではないか。

(洞雲寺住職 鈴木一基氏の話)

- ④ 石松が代参に行った帰り、生家に 2、3 日滞在し、お札や土産を近所に配った。「うちにも石松があいさつに来て、数人の子分たちが取り巻いて、それは怖かった。」と聞いた。

(石松の生家の隣家に住む大叔母から故菅沼光男氏が聞いた話)

- ⑤ 弟の佐与吉が石松の首だけを持ち帰り、洞雲寺に埋葬しようとしたが村人に大反対された。人並みの葬儀ができず、首を入れたかめだけを埋め、その上に自然石を置いた。1979年(昭54)頃、墓の修復をすると、ちょうど首が入るほどの大きさのかめが出土した。水がたまっていて、石屋はそのまま埋め戻した。(洞雲寺住職 鈴木一基氏の話)

- ⑥ 富岡では、ぐずる子供に「ばくち打ちが高張りちょうちんを持ってさらいに来るぞ」と言い聞かせたという。都鳥一家が、血相を変えて石松の首をさがしに来た恐怖の記憶が脳裏に染みこんだのだろう。(中日新聞：古里点描 1999. 3. 14)

- ⑦ 佐与吉はかったい(ハンセン病)だったという。石松は佐与吉を連れて街道筋(賀茂方面)へ出て、博打打ちの三下を斬り殺し、腹を断ち割り、薬効とされた生き肝を佐与吉に食べさせた。野ざらしになっていた死体を地元の村人が葬った。

- ⑧ 山本家の三度目の火災は、石松が火をつけたのではないかといわれている。(年齢的にどうかと思われるが) (⑦, ⑧は鈴木, 伊田氏等が伝え聞いた話)

- ⑨ 佐与吉の長男「欽吉」は大酒飲みで、けんか吉と呼ばれた。先代の大僧正(明治36年生)が9歳の時、欽吉が「戒名が低すぎる」とどなり込み、先々代を脅した。後日、禅定門から格上げ、佐与吉の戒名は「直証正念庵主」となった。(洞雲寺住職：鈴木一基氏)

石松に関わる写真資料



森の石松の生家跡（山本家）



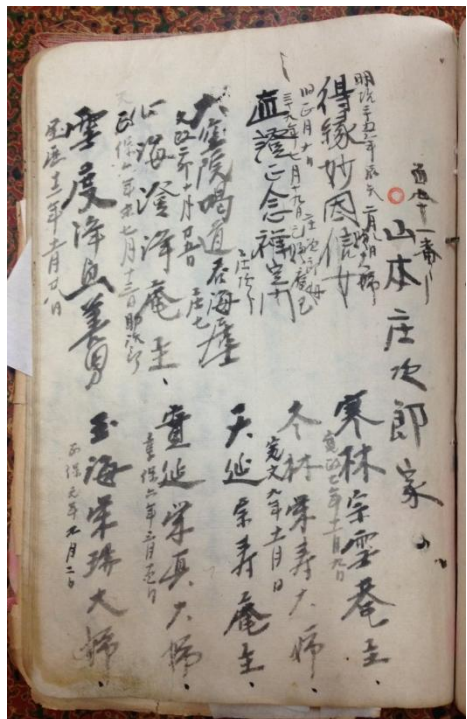
山本家代々の墓



森の石松の墓



山本家の位牌（大正8年）



山本家過去帳（明31年火災焼失後に作成，石松の戒名はない。）

以上文責（八名郷土史会 安形）